

出エジプト記1-2章 「神の契約に反対する勢力」

1A 出エジプト記

1B モーセ五書の中

2B 世からの贖い

2A ヨセフを知らないファラオ 1

1B イスラエルの子の広がり 1-7

2B 過酷な労役による抑えつけ 8-14

3B 助産婦への殺人命令 15-21

4B ナイル川への投棄 22

3A 水からの引き出し 2

1B 水の中のかご 1-10

1C レビ人の信仰 1-4

2C ファラオの娘の同情 5-10

2B エジプト人の殺害 11-15

3B ミティアン人と的人生 16-22

4B 苦しみを聞く神 23-25

本文

出エジプト記 1 章を開いてください。

1A 出エジプト記

1B モーセ五書の中

私たちはこれから、出エジプト記を見ていきますが、この言葉は、ヘブル語の聖書をギリシア語に訳した七十人訳から来た言葉です。脱出という意味のギリシア語があてがわれています。けれども、元々のヘブル語の聖書は「シェモト(שֵׁמֶת)」であり、「そして」とか「さて」という意味しかありません。1 章 1 節を見てください、「さて」という言葉から始まりますね。なんと、この文頭の単語を書名にしただけです。

出エジプト記は、創世記から「さて」とか、「そして」とかということで、そのまま続きの書物です。そして興味深いことに、出エジプト記の終わりは、モーセが幕屋を組み立てて、その中に栄光の雲が満ちましたが、その次の書、レビ記で「主は、モーセを呼び」と続きます。ドラマでシリーズ1があつて、シリーズ2、シリーズ3、そして4あるとすると、出エジプト記は、シリーズ2に当たります。

ですから、大きな流れの中で、この書を見ていくべきなのです。創世記には、神の祝福の始まり

がありました。天地を造られ、人を造られ祝福された神ですが、人が罪を犯したために、のろいに置かれました。しかし、主は、ノアに対して祝福を再び宣言し、けれどもバベルの塔で人々が神のようになろうとして、それで散らされました。その中にいたアブラハムを主は呼び出して、彼を祝福し、彼から国民を造り、その国民への祝福によって、全世界を祝福するというご計画を立てたのです。それで、その祝福の約束が、アブラハムからイサクへ、イサクからヤコブへ引き継がれ、そして十二人の息子に祝福が受け継がれました。

その彼らが、今、エジプトにいるということです。約束を受けた民が、その通り、増え広がり、強くなっていますのに、エジプトの王がそれを圧迫し、抑えつけようとしたしました。そこから救い出す、贖い出すとも言いますが、それが出エジプト記のテーマです。そして、その贖い出された民が、荒野において、主の栄光を見る能够性がある、彼らの間にご自身が宿る幕屋を置かれます。

そして、その幕屋にある栄光から、語られた主のことばが、レビ記です。主の前に出ていく祭司たちへの命令、また民がいかに、汚れから離れて聖く生きるかを教えています。出エジプト記は、贖いがテーマですが、レビ記が聖めがテーマです。そして、民数記によって荒野の旅がありますが、世における歩みがテーマになっており、そして申命記では、主に愛され、主を愛するという、結婚式の誓約のように、勧めが書かれています。

このモーセ五書全体が、神の救いのご計画全体を示しています。イスラエルの民の歴史そのものが、そこに加えられた異邦人も含めて、キリスト者に対する神のご計画を反映しています。祝福の約束を、神の選びによって受け継いだ私たちが、世から贖われ、そして世から聖め別たれた生活をし、そして歩みます。事の本質は、キリストの愛によって、神の命令を守ることです。

2B 世からの贖い

これから1章を読めば明らかに分かりますが、神の約束がイスラエルにかなえられているのに、それを抑えつけ、奴隸にしていくエジプトの王、ファラオの姿があります。しかし主が、それをよしとせず、彼らを贖い出すために、ファラオとその国にさばきを下します。これが、世からの贖いを示しています。キリストの流された血潮によって、私たちは世から贖い出されました。そして、世を、キリストはさばかれるのです。

2A ヨセフを知らないファラオ 1

1B イスラエルの子の広がり 1-7

¹さて、ヤコブとともに、それぞれ自分の家族を連れてエジプトに来た、イスラエルの息子たちの名は次のとおりである。

ヤコブの家族のことは創世記にも書かれていましたが、ここで強調されているのは、その次の世

代です。「自分の家族」とあります。息子たちの家族です。ヤコブは死にました。息子たちがエジプトに下って来たことを強調しています。

² ルベン、シメオン、レビ、ユダ。³ イッサカル、ゼブルン、ベニヤミン。⁴ ダンとナフタリ。ガドとアシエル。⁵ ヤコブの腰から生まれ出た者の総数は七十名であった。ヨセフはすでにエジプトにいた。⁶ それから、ヨセフもその兄弟たちも、またその時代の人々もみな死んだ。

十二人の息子の名があり、ヨセフ自身も兄弟たちも死んだと言っています。一つの時代が過ぎ去りました。

⁷ イスラエルの子らは多くの子を生んで、群れ広がり、増えて非常に強くなつた。こうしてその地は彼らで満ちた。

息子たちが死んでも、神の契約と約束は、何も変わりません。アブラハム、イサク、ヤコブに神が語られた、子が増えて、強い国民になるという約束が、その通りになっています。すでに、ヤコブの生きている時、多くの子が生まれていました。そして、エジプトの地で、このように生まれ、強くなっています。エジプトを出て行く時点で、イスラエルの壯年男子が、約六十万いたとありますので(12:37)、女子供を合わせると約200万から300万人がいたのではないかと言われます。

ここから、イスラエルを、神がなぜ立てられたのかがよくわかります。「生めよ、増えよ、地に満ちよ」と、主がアダムに、再度、ノアに対して祝福の命令を出しました。そのことを、イスラエルの国民によって証しする、ということです。イスラエルは、神が人々に行われることの証し人として立てられています。イスラエルを見れば、神が世界に対して何を行っているのかを知ることができます。

2B 過酷な労役による抑えつけ 8-14

⁸ やがて、ヨセフのことを知らない新しい王がエジプトに起つた。

ここ「知らない」というのは、単に情報として知らないという意味ではありません。ファラオが、モーセとアロンに行ったことばに、「私は主を知らない(5:2)」があります。「そんなの、知るか!」という、侮蔑、無知、意図的な無視の意味合いが込められた言葉です。ですから、この王は、ただヨセフを知らなかったという無垢のような人ではなく、ヨセフには神がおられると、神を認めた、かつてのファラオには倣っていないということになります。

イスラエルがこのように増えて、強くなっていくのを、かつてのファラオが見たならば、神の靈がなければありえないと、神をほめたたえたでしょうが、今はそうではないのです。次を見てください。

⁹ 彼は民に言った。「見よ。イスラエルの民はわれわれよりも多く、また強い。¹⁰ さあ、彼らを賢く取り扱おう。彼らが多くなり、いざ戦いというときに敵側についてわれわれと戦い、この地から出て行くことがないように。」

このファラオには、強い思惑がありました。イスラエルの民を賢く、自分たちの労働力にすることです。まず、彼らが多くなり、戦いの時に敵側につく、そしてこの地から出て行くということについて、当時、ヒクソス人というセム系の民がいたことを、以前にもお話ししました。遊牧民であり、当時、ヒクソス人がエジプトを乗っ取り、エジプト王朝を築いた時期がありました。同じセム系であり、かつ遊牧を生業としているヘブル人が、同じように戦いを挑み、それからカナンの地に戻っていくのではないか？と恐れたのです。

もし彼らが出て行ったら、大切な労働力を失います。似たような人がいましたね。ヤコブのおじ、ラバンです。ヤコブが勤勉に働いて、羊や牛などの牧畜で、ラバンが栄えていたのを彼自身が知っていました。だから、ヤコブから搾り取れるものは、とことんまで搾り取ろうとしました。ですから、このファラオは、イスラエルの神は認めないが、収益は得たいという貪欲なのです。祝福は欲しいが、その源である神は要らないというのは、よくある、人間の姿ですね。

¹¹ そこで、彼らを重い労役で苦しめようと、彼らの上に役務の監督を任命した。また、ファラオのために倉庫の町ピトムとラメセスを建てた。

彼らを重い労役で、その力を削ごうとしました。ここで、かつてアブラハムに主が語っていたとおりになります。「創 15:13 あなたは、このことをよく知っておきなさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない地で寄留者となり、四百年の間、奴隸となって苦しめられる。」

そして、「役務の監督を任命した」とありますが、役務者は、奴隸にむち打ちをし、酷い取り扱いをしました。ファラオが持っていた銅板には、王が奴隸をむち打っているものが刻まれています。これが、王が民を従えている姿として、恥ずかし気もなく描けるというところに、エジプトの過酷さを物語っています。

そして、この奴隸として使役している姿が、世において、人々を悪魔が罪の中で縛り付けていることに重なるのです。そこから贖い出すのが神のご計画です。「コロ 1:13 御父は、私たちを暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」とあります。

そして、「ピトムとラメセス」は、かつてファラオが、ヨセフを通してヤコブの家族に与えた、ナイル下流東部にあるゴシェンの地の中になります。今、遺跡が見つかっています。

¹² しかし、苦しめれば苦しめるほど、この民はますます増え広がったので、人々はイスラエルの子らに恐怖を抱くようになった。

ここが、午前礼拝で取り扱ったところです。彼らが増え広がるのは、神の約束の通りです。では、それを阻むために、苦しみを与えるとどうなるのか？むしろ、増え広がるのです。

それは、苦しみによって、人々は、一時的なものではなく、永続するものに抛り頼むようになるからです。表面的なものではなく、本質的なことにより頼むようになります。試されると、信んでいる者たちでも離れていく者たちが出てきますが、そもそも、何を信じていたのかが明らかにされたにすぎません。「エレ 23:28 夢を見た預言者は夢を語るがよい。しかし、わたしのことばを受けた者は、わたしのことばを忠実に語らなければならない。麦は藁と何の関わりがあるだろうか。」とエレミヤは預言しました。試練において、藁は吹き飛ばされるのです。

そして、純化されたものによって、神は偉大な力を現わします。神のみことばだけにより頼むことによって、神のみことば通りになります。良い土地に落ちた種は、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶのです。士師の時代に、ギデオンは、自分たちの軍を主によって三百人まで減らされました。けれども、彼らは心が主に向かっていました。主は、心をご自身に獻げた者たちによって、13万5千人のミディアン人の軍に圧倒的に打ち勝つようにしてくださいました。数ではなく、神と一つ心になっていることが大切です。

そもそも、主のなさることは、妨げることはできません。そして、神はその妨げをも、かえってご自分の目的のために用いられるのです。「イザ 14:27 万軍の【主】が計画されたことを、だれがくつがえせるだろうか。御手が伸ばされている。だれがそれを押し戻せるだろうか。」

¹³ それでエジプト人は、イスラエルの子らに過酷な労働を課し、¹⁴ 漆喰やれんが作りの激しい労働や、畑のあらゆる労働など、彼らに課す過酷なすべての労働で、彼らの生活を苦しいものにした。

彼らは、さらに過酷な労働を課しました。漆喰とれんが作り、また畑の労働です。当時の遺跡には、煉瓦作りの跡が出て来ています。その中には、イスラエル人の労働によるものもあるでしょう。

手作業でのれんが作りは、過酷です。今、パキスタンにクリスチャンたちがいますが、その多くが貧しく、職業でれんが作りがあります。汚染された水と土を足で踏んで混ぜ、手作業で木枠に詰め込みます。一日に千個以上のノルマが課せられ、常に腰を屈めた姿勢での作業です。それを、頭の上や手押し車で、窯まで運びます。それから窯焼きの時、夏は酷暑なので、とてつもない高熱の中での作業です。エジプトも暑いので、イスラエル人も同じような劣悪な環境だったのでしょう。

3B 助産婦への殺人命令 15-21

¹⁵ また、エジプトの王は、ヘブル人の助産婦たちに命じた。一人の名はシフラ、もう一人の名はプアであった。

シフラは「美」という意味で、プアは「輝き」というような意味です。彼女たちは、まさに麗しい働きをします。二人は、数ある助産婦たちの長だったのでしょう。

¹⁶ 彼は言った。「ヘブル人の女の出産を助けるとき、産み台の上を見て、もし男の子なら、殺さなければならぬ。女の子なら、生かしておけ。」

ファラオの、イスラエル人を抑え込みたい思惑は、歯止めがきかなくなります。極端になり、ついに悪魔的になります。殺しです。私は、2013 年に自分が団長となって聖地旅行を導いた時に、ホロコースト記念館も訪れました。そこで、参加者に「初めての反ユダヤ主義は、聖書ではどこから始まりましたか？」と尋ねました。答えがなかなか来ないで、エステル記と答えた人もいました。けれども私は、出エジプト記を指しました。イスラエルの民の歴史は、その民が民として誕生する時に、自分たちが滅ぼされるのを救い出されることによって、生まれたのです。この時からずっと、聖書では、イスラエルの名を消し去りたい勢力に取り囲まれ、その戦いに打ち勝つことが、そのまま救いになりました。ただ、戦争の歴史だと旧約聖書を捕えたら、間違いになります。そして、その後も迫害の歴史は続き、その頂点がホロコーストだったのです。

その姿を、幻で描いているのが、黙示録 12 章です。「12:4 その尾は天の星の三分の一を引き寄せて、それらを地に投げ落とした。また竜は、子を産もうとしている女の前に立ち、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。」この女は、ヨセフの見た夢から来たものですから、イスラエルです。黙示録 12 章では、竜、すなわち悪魔が、荒野において洪水で、彼女を呑みほそうとしています。これが、大患難、ダニエルの預言、第七十週目の後半の三年半です。

神の働きを何とかして歯止めをかけようとする動きの背後に、悪魔がいます。神の作品である人に、蛇によってエバに現れたのも悪魔です。そして、神がご自分の目的のために、召し、選ばれたのがイスラエルです。イスラエルを滅ぼすことによって、神のご契約と、そのご契約にある神のご性質や栄光を消し去ることが、悪魔の目的です。そして、イスラエルへの契約や約束に、キリストにあって近づけていただいたのが、キリスト者です。ですから、同じように悪魔は、私たちの信仰をなきものにするために、あがいているのです。

¹⁷ しかし、助産婦たちは神を恐れ、エジプトの王が命じたとおりにはしないで、男の子を生かしておいた。¹⁸ そこで、エジプトの王はその助産婦たちを呼んで言った。「なぜこのようなことをして、男の子を生かしておいたのか。」¹⁹ 助産婦たちはファラオに答えた。「ヘブル人の女はエジプト人の女と

は違います。彼女たちは元気で、助産婦が行く前に産んでしまうのです。」

ここで最も重要な言葉は、「神を恐れ」です。ヨセフも神を恐れました。それで、ポティファルの妻と寝るのを拒みました。ここでシフラとプアも、神を恐れました。それで、生まれてきたヘブル人の男の子を殺すのを、拒みました。

ここで、自分たちがやってくる前に、ヘブル人の女は男の子を産むと言っているのが、嘘なのか、本当だったのかと言う議論があります。私は、それは意味がないと思います。平時に、嘘をつくというのは、罪です。自分のために嘘をついているからです。けれども、今ここでは、命がかかっています。しかも、神の選ばれた民のいのちです。後に、ラハブも、イスラエルからエリコにやって来た人々を、匿いました。明らかに、ここにはいないという嘘をつきました。しかし、信仰によってラハブがかくまつたと、ヘブル 11 章に出てきます。

私たちは、人を恐れるのか、神を恐れるのかのどちらかです。人を恐れれば、神をないがしろにします。神を恐れれば、人を恐れることはできません。「ルカ 12:4-7 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。5 恐れなければならぬ方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。6 五羽の雀が、ニアサリオンで売られているではありませんか。そんな雀の一羽でも、神の御前で忘れられてはいません。7 それどころか、あなたがたの髪の毛さえも、すべて数えられています。恐れることはありません。あなたがたは、多くの雀よりも価値があるのです。」

²⁰ 神はこの助産婦たちに良くしてくださった。そのため、この民は増えて非常に強くなった。²¹ 助産婦たちは神を恐れたので、神は彼女たちの家を栄えさせた。

見てください、確実に、神がアブラハムへ語られたことがそうなっています。「創 12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。」彼女たちは、男の子たちを守ったので、それで神は彼女たちの家を栄えさせました。

4B ナイル川への投棄 22

そこでファラオの悪魔的仕業は、さらにエスカレートします。

²² ファラオは自分のすべての民に次のように命じた。「生まれた男の子はみな、ナイル川に投げ込まなければならない。女の子はみな、生かしておかなければならない。」

これは、すべてのエジプトの民に、ヘブル人で生まれてきた男の子を、ナイル川に投げ込めと命

じています。男は、戦いの時に兵士となります。女が残されても、脅威とはならず、女奴隸として使役できると思ったのでしょうか。国民全体監視体制を作ったのです。恐ろしいことです。

ここには、いろいろな意味が含まれています。まず、男の子が狙われているのは、聖書全体を見て、分かりますね。女の子孫から、悪魔のしわざを打ち碎くキリストが現れるということです。そして、アブラハムの子孫に、キリストが来られるという約束です。ここで、男の子を滅ぼすことは、神が世界を救われるご計画を台無しにすることができます。

そして事実、先に、黙示録 12 章の幻で見たように、イスラエルの子孫であるキリストが、お生まれになった時、御使いによってヨハネとマリアはエジプトに下りました。そのことによって、ヘロデ大王による、ベツレヘムでの二歳以下の男の子が虐殺を免れることができました。同じように、次の章、2 章で、モーセがエジプトの川から引き出されて、その虐殺を免れることができます。つまり、イスラエルの男の子が、エジプトで滅ぼされるこの出来事は、後のキリストご自身が殺されるのを免れることを、予め示していました。

そして、水に投げ入れられることですが、後に今度は、エジプト軍とファラオが、紅海の水の中に沈むことになります。これこそが、アブラハムに約束された呪いです。イスラエルを呪う者は、呪われるのです。水で殺したのですから、水の中で死に絶えます。

さらに、水には大きな意味があります。全く同じように、ノアの家族は水の中から救われます。水によって世界が裁かれ、水を通して救われます。それがキリストにつくバプテスマを示していることを、ペテロが第一の手紙で話しました。3 章で、ノアの時代の洪水を語った後に、こう書きました。「I ペテ 3:21 この水はまた、今あなたがたをイエス・キリストの復活を通して救うバプテスマの型なのです。バプテスマは肉の汚れを取り除くものではありません。それはむしろ、健全な良心が神に対して行う誓約です。」

3A 水からの引き出し 2

それでは 2 章、この、水からの引き出される男の子の話を読みましょう。

1B 水の中のかご 1-10

1C レビ人の信仰 1-4

¹さて、レビの家のある人がレビ人の娘を妻に迎えた。²彼女は身ごもって男の子を産み、その子がかわいいのを見て、三か月間その子を隠しておいた。³しかし、それ以上隠しきれなくなり、その子のためにパピルスのかごを取り、それに瀝青と樹脂を塗って、その子を中に入れ、ナイル川の岸の葦の茂みの中に置いた。

レビの家から生まれた子です。思えば、ヤコブがシメオンとレビに対して、「創 49:7 のろわれよ、彼らの激しい怒り、彼らの凄まじい憤りは。私はヤコブの中で彼らを引き裂き、イスラエルの中に散らそう。」と言わっていました。けれども、レビには神の憐れみと贖いがありました。それは、確かに散らされるのですが、主の聖所で仕える者たちとして召されます。相続地はないですが、主ご自身の臨在という相続にあずかります。

男の子がかわいいのを見て、その子を三ヶ月隠し、けれども、隠しきれなくなり、ナイル川にかごを浮かべて隠す、つまり、ナイル川に投げ込んだふりをしたわけです。この一つ一つに、彼らに与えられていた信仰を働かせていたことを、ヘブル書の著者は述べています。「ヘブル 11:23 信仰によって、モーセは生まれてから三ヶ月の間、両親によって隠されていました。彼らがその子のかわいいのを見、また、王の命令を恐れなかったからです。」やはり、助産婦と同じように、イスラエルに与えられた神の約束を信じて、王が命令してもそれに従わなかったのです。

私たちキリスト者も、似たようなことをした模範がいます。使徒ペテロです。イエスの名によって教えるなど命じられましたが、こう答えました。「使 4:19 神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従うほうが、神の御前に正しいかどうか、判断してください。」ロマ 13 章 1 節にあるように、上の権威は、すべて神から来ています。ですから、権威に従うのが、神のみこころです。法律にしたがう、また、納税をはたします。今の政治や行政にどんな不満があっても、立てられている権威を敬うのです。しかし、神に従う時に、王がそれとは反対のことを命じてきたらどうするのか？その時は権威を飛ばして、神ご自身の権威にしたがうのです。

それから、「パピルスのかごを取り、それに瀝青と樹脂を塗って」とありますね。先ほど言いましたように、ノアの箱舟と重なるのです。水が入ってこないように、タールを木に塗りました。水によって滅ぼされるのを、そこで説明しましたが、そこに出で来るタールは、「贖罪」という意味のヘブル語です。罪による神のさばき、その水のさばきから、救われるという意味を持っています。モーセも、水の中に入れられても、そこから救われるということを、赤ん坊の時に証ししているのです。

⁴ その子の姉は、その子がどうなるかと思って、離れたところに立っていた。

モーセには姉がいました、ミリアムです。彼女は、同じくモーセの兄アロンといっしょに、荒野の旅を共にします。

2C フラオの娘の同情 5-10

⁵ すると、フラオの娘が水浴びをしようとナイルに下りて来た。侍女たちはナイルの川辺を歩いていた。彼女は葦の茂みの中にそのかごがあるのを見つけ、召使いの女を遣わして取って来させた。

⁶ それを開けて、見ると、子どもがいた。なんと、それは男の子で、泣いていた。彼女はその子をか

わいそうに思い、言った。「これはヘブル人の子どもです。」

モーセの親は、だれかが拾ってくれないかと期待して、かごの中に入れていましたが、なんと、命令を出したファラオ自身の娘が水浴びに来ました！そして、もっと驚くのは、ヘブル人の子だと知って、かわいそうに思っていました。エジプト人がファラオのしていることに賛成しているわけではなく、実に娘自身も、よく思っていなかったことが分かります。

この娘ですが、歴史上では有名な人です。トメス一世の娘で、ハトシェプストと言われています。トメス二世の妻になりましたが、トメス二世は若くして死んだのですが、二世の息子であるトメス三世がまだ幼かったため、共同統治をハトシェプストがするようになりました。実質のファラオです。公的な場では男装して、顎に付け髭をしていたと伝えられています。

⁷ その子の姉はファラオの娘に言った。「私が行って、あなた様にヘブル人の中から乳母を一人呼んで参りましょうか。あなた様に代わって、その子に乳を飲ませるために。」⁸ ファラオの娘が「行って来ておくれ」と言ったので、少女は行き、その子の母を呼んで来た。⁹ ファラオの娘は母親に言った。「この子を連れて行き、私に代わって乳を飲ませてください。私が賃金を払いましょう。」それで彼女はその子を引き取って、乳を飲ませた。

ミリアムは、かなりの知能犯です！賢い娘でした。ヘブル人の乳母を連れてきて、それが自分の母、モーセの母だったのです。それで、そのまま引き取り、お乳を飲ませて、しかも賃金を受け取るということになります。この幼いモーセに、母親が、彼がヘブル人であることをしっかりと教えました。それが分かるのは、彼が成人してから、イスラエル人を同胞とみなし、彼らが苦しんでいるのに同情していることです。

幼い時に、主の教えを教えることは、みこころです。「箴 22:6 若者をその行く道にふさわしく教育せよ。そうすれば、年老いても、それから離れない。」パウロは、テモテについて話しています。「Ⅱテモ 3:15 また、自分が幼いころから聖書に親しんできたことも知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えて、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。」

¹⁰ その子が大きくなったとき、母はその子をファラオの娘のもとに連れて行き、その子は王女の息子になった。王女はその子をモーセと名づけた。彼女は「水の中から、私がこの子を引き出したから」と言った。

モーセの乳離れの時が来ました。それで、ファラオの娘のところに連れて行きますが、王女の養子になります。つまり、ファラオの王権を受け継ぐことのできる、王族の中に入ったのです。

そして、モーセの名は「引き出す」というヘブル語のマシャから派生しました。けれども、エジプト語では「男の子」という意味しかないそうです。それをヘブル語にした時に、マシャという言葉になり、それで彼の名がヘブル語でモーセとなりました。

この名が、彼のこれから的人生の特長となり、さらに神の救いのご計画を示していく名前となつていきます。つまり、人を苦しみのところから引き出し、また神が、罪の中で奴隸となっている者たちを贖い出す、ということです。

2B エジプト人の殺害 11-15

¹¹ こうして日がたち、モーセは大人になった。彼は同胞たちのところへ出て行き、その苦役を見た。そして、自分の同胞であるヘブル人の一人を、一人のエジプト人が打っているのを見た。

彼は四十歳になっています。モーセがこれまで、どんな生活をしていたかを、ステパノがサンヘドリンで弁明した時に語りました。「使 7:22 モーセは、エジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにも行いにも力がありました。」当時のエジプトの学問は、世界で最高学府と呼ばれるべきものでした。そして彼は、「ことばに力があった」とのことですが、雄弁であったようです。さらに「行いに力があった」ということですが、非常に有能であったことが分かります。

ところが、ヘブル人が打たれているのを見て、「同胞」だとみなし、憐れみを抱いているのです。これが、彼がイスラエルの民に属し、エジプトの宮廷にいても、変わらなかつたことを示しています。これは、自分が神の民と共にいることを示しています。私たちは、自分が神の民の一部になつてゐるとみなしているでしょうか？ある時は、世と同じで、またある時は神の家族に、ではないのです。

¹² 彼はあたりを見回し、だれもいないのを確かめると、そのエジプト人を打ち殺し、砂の中に埋めた。

モーセの、救い出したい思いは正しいです。しかし、エジプト人を打ち殺してしまうのは、まさに彼の肉です。先にヤコブの預言を引用しましたが、かつてシェケムの住民を虐殺したレビと、同じ肉の性質を持っています。

¹³ 次の日、また外に出てみると、見よ、二人のヘブル人が争っていた。モーセは、悪いほうに「どうして自分の仲間を打つのか」と言った。¹⁴ 彼は言った。「だれがおまえを、指導者やさばき人として私たちの上に任命したのか。おまえは、あのエジプト人を殺したように、私も殺そうというのか。」そこでモーセは恐れて、きっとあのことが知られたのだと思った。

モーセにとって、あってはならないことが起こりました。同胞であるイスラエル人が、他のイスラエ

ル人を打っているのです。これはいけないと思って、介入したら、なんと彼は、自分がエジプト人を殺したのを知っていました。

私たちが大いなる教訓をモーセから学びます。自分の肉で、神の働きを完成させることはできない、ということです。神のわざは、御靈によってでなければ、成し遂げられないということです。「ガラ 3:3 あなたがたはそんなにも愚かなのですか。御靈によって始ましたあなたがたが、今、肉によって完成されるというのですか。」肉によれば、自分が達成したいと思うことの、ほんの少しでもすることができません。

四十年後、モーセはエジプトに戻り、二百万人から三百万人のイスラエル人を引き連れて、エジプトを出て行きます。そして、エジプト軍の精銳部隊を海の中に沈ませることができたのです。これは、彼自身が行ったことではなく、主ご自身が命令をして、それに従っただけで、彼が行ったことではないからです。これが、御靈によって導かれることです。御靈によって、初めて神のわざを行うことができ、実が結ばれます。

そして、再びステパノの、サンヘドリンにおける弁明で語られていることを取り上げたいと思います。「使 7:25 モーセは、自分の手によって神が同胞に救いを与えようとしておられることを、皆が理解してくれるものと思っていたが、彼らは理解しませんでした。」モーセは、ヘブル人であるのに、なんとファラオの家にいました。ですから、当然、イスラエル人を苦しみから救い出すために、ここに置かれていると理解してくれると思いました。ところが、そうでなかつたのです。

これから、彼はミディアン人のところに行きます。それから、四十年後に戻って来て、イスラエル人のところに行き、そこで彼らはモーセが預言者であることを認めます。かつて、似たような生涯を通った人がいましたね。ヨセフです。自分が、人々が伏し拝むようになることを夢で見ました。ところが、兄たちに妬まれて、エジプトに売られました。けれども、二度目に彼らに会う時は、彼らはひれ伏したのです。このことをステパノは語り、キリストご自身がそうではないか！と訴えたのです。つまり、初めに来られた時、同胞のユダヤ人に拒まれた。けれども、異邦人の間で受けられられ、二度目に来る時に、ご自分の民、ユダヤ人に受け入れられる、ということです。

¹⁵ ファラオはこのことを聞いて、モーセを殺そうと捜した。しかし、モーセはファラオのもとから逃れ、ミディアンの地に着き、井戸の傍らに座った。

モーセは、ここでエジプトを離れました。ファラオの耳に、自分がエジプト人を殺したことが入ったからです。しかし、ヘブル書 11 章を見ますと、彼は平安のうちに出て行ったことが分かります。「11:24-27 信仰によって、モーセは成人したときに、ファラオの娘の息子と呼ばれることを拒み、25 はかない罪の楽しみにふけるよりも、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。26

彼は、キリストのゆえに受ける辱めを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えました。それは、与えられる報いから目を離さなかったからでした。²⁷ 信仰によって、彼は王の憤りを恐れることなくエジプトを立ち去りました。目に見えない方を見ているようにして、忍び通したのです。」

モーセには、自分がどこに属しているのか、はっきりしていました。神の民と一つになっている、ということです。そして、もう一つはっきりしていることがありました。神の民と共に苦しみことのほうが、エジプトでの罪の楽しみよりも、まさっているということです。キリストにある、神の民が受け継ぐものは、エジプトの宝よりも、はるかに、はるかに優っているのです。であれば、神の民であるゆえに、キリストのゆえに苦しみを受けても、全然、報いが大きいことを知っていたのです。また、エジプトにおける罪の楽しみは、はかないことも知っていました。こうやって、彼には何を選び取らなければいけないのかが、明確になっていたのです。これで、ファラオの憤りも恐れることなく、立ち去ることができた理由です。

私たちが、ここまで未練を世に持っていないということが必要です。世の楽しみは過ぎ去ります。けれども、キリストに従えば、世においては損をします。しかし、その失ったもの以上に、はるかにすぐれたものを、受け継ぐことができるのです。

そしてここに、「ミディアンの地に着き」とあります。シナイ半島の南東部分と、アラビア半島の北西部に生きていました。アカバ湾を挟んで住んでいたと言われています。モーセが行ったのはどちらか？紅海が分かれたのはどちらなのか？と、いろいろ意見が分かれます。いろいろ、意見が別れます、モーセが行ったのは、シナイ半島の南東部分ではないかと思われます。

3B ミティアン人との人生 16-22

¹⁶ さて、ミディアンの祭司に七人の娘がいた。彼女たちは父の羊の群れに水を飲ませに来て、水を汲み、水ぶねに満たしていた。¹⁷ そのとき、羊飼いたちが来て、彼女たちを追い払った。するとモーセは立ち上がって、娘たちを助けてやり、羊の群れに水を飲ませた。

「ミディアンの祭司」とありますが、異教の神々の祭司です。けれども、彼らはアブラハム、イサク、ヤコブの神は、うつすらと聞いていたものと思われます。後に、モーセの働きを見て、確かにこの方がまことの神であることを、彼は認めることになります。

そして、彼に「七人の娘」がいました。リベカの時、またラケルの時と同じように、女たちが羊飼いをしています。しかも、神の完全数、七人です。けれども、彼女たちは男の羊飼いたちに追い払われるような仕打ちを受けていました。けれども、モーセがどこに行っても変わりなく、虐げられている人々から弱い人々を救い出す働きをしていますね。神の召しと賜物を受けています。

¹⁸ 彼女たちが父レウエルのところに帰ったとき、父は言った。「どうして今日はこんなに早く帰ってきたのか。」¹⁹ 娘たちは答えた。「一人のエジプト人が、私たちを羊飼いたちの手から助けてくれました。そのうえ、その人は私たちのために水汲みまでして、羊の群れに飲ませてくれました。」

父の名「レウエル」は、イテロの別名です。

²⁰ 父は娘たちに言った。「その人はどこにいるのか。どうして、その人を置いてきてしまったのか。食事を差し上げたいので、その人を呼んで来なさい。」²¹ モーセは心を決めて、この人のところに住むことにした。そこで、その人は娘のツィポラをモーセに与えた。

ここ、「心を決めて」というのは、ここに満足したという意味合いもあります。ですから、モーセは、ここにいることが、神のみこころなのだとしたということです。

²² 彼女は男の子を産んだ。モーセはその子をゲルショムと名づけた。「私は異国にいる寄留者だ」と言ったからである。

ツィポラを妻として迎え、それで生まれた子に、「私は異国にいる寄留者だ」と与えています。彼の心にも、ヤコブ、ヨセフと同じ DNA が与えられています。ここミディアンは、異国であり、寄留者なのだということです。そもそも、エジプトそのものが異国であり、寄留者です。そのことも、見据えていることでしょう。自分はここで落ち着くことはないということです。けれども、主が今は、ここに住むようにされて、家族を持つようにされたのだということです。

私たちも、今は、理想とは違うかもしないけれども、与えられている分に留まり、そこで主に仕えるということになります。

4B 苦しみを聞く神 23-25

²³ それから何年もたって、エジプトの王は死んだ。イスラエルの子らは重い労働にうめき、泣き叫んだ。重い労働による彼らの叫びは神に届いた。²⁴ 神は彼らの嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。²⁵ 神はイスラエルの子らをご覧になった。神は彼らをみこころに留められた。

モーセのいのちを狙っていたファラオは死にますから、自分はエジプトに戻ることができます。

この間、すなわちエジプトに下り、それから出て行くまでの間は 430 年でした。そして、ヨセフのことを知らない王が出てから、300 年以上でしょうか、彼らは苦しました。重い労働にうめき、泣き悲しんでいること、これらは神の耳に届いているのです。

神の行動を、動詞を辿ると見ることができます。一つは、「嘆きを聞く」ということです。神は、聞かれる方です。そして、「思い起こされる」方です。これは、忘れてしまったと言うことでは決してないのです。そうではなく、心に温めていたが、今、実行に移す時だと思われること、それが思い起こしです。そして、「みこころにとめた」ということです。気にかけた、ということです。

主が、アブラハム、イサク、ヤコブに約束したこと、その契約は、たった今、実行されようとしています。祝福の約束です。すでに四百年ぐらい経っていますが、神は決して忘れず、また苦しむのを見ていなことは決してなく、彼らの叫びを聞いています。それで思い起こす、つまり実行に移されます。神は、途方もなく気が長いです。永遠の神ですから、そうですね。

けれども、同時にそれは、神が忍耐の方であることがわかります。つまり、神はイスラエルの救いのために、待っておられたのです。イスラエルは、神の救いのご計画の証しです。彼らが、確かに虐げられ、苦しむというのも、神がご自分の御国に反対する世の勢力があることを、示さないといけません。その中から救い出すのは、確かに私たちがキリストにあって、世から救われることを示すことになるのです。だからこそ、長い期間がかかりました。

主が私たちに対しても、忍耐をもって事を行われます。時間がかかります。けれども、そこに私たちの品性が生まれます。そして希望が生まれ、愛が注がれます。「ロマ 5:3-5 それだけではなく、苦難さえも喜んでいます。それは、苦難が忍耐を生み出し、4 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。5 この希望は失望に終わることはありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれていますからです。」